

東京市々醫 出浦義毅先生序文  
東京市神田區役所 畑田道芝君序文  
東京市神田區役所 衛生係 宮本春重君序文

261  
381

實用  
現行傳染病論

醫藥指針社

特<sup>65</sup>  
419

序

吾友宮本君は多年意を衛生上に注かれ公務  
の余暇を以て曩に衛生法規の著あり今又衛  
生の普及せざるを慨し實用現行傳染病論の  
著あり頃日來て余に示さる余之を閲するに  
簡明にして能く其要を摘し婦女子と雖も一  
見其旨を解にるに難からず故に各戸此一小  
冊子を備へば則ち衛生上の利益豈鮮少なら

48. 7. 26

内交

すとせしや敢て不肖を顧みず卷端に辨する  
一爾り

明治四十三年七月

出 浦 義 毅

序

國運の隆替は一家の盛衰に於けるが如く吾  
人が心神動作の如何に因由するや論なき也  
故に治國齊家の大本は個人の衛生に在るこ  
とを遺忘す可からず而して吾人が最も恐る  
べきものは傳染病にして其の一朝流行する  
や吾人を最も急劇に襲撃し一家一國を悲酸  
なる運命に陥らしむ爰を以て吾人は本病に

對する豫防消毒の一斑を知了するの必要あり友人宮本君傳染病論を編す本書三十余頁の小冊子に過ぎずと雖も能く其要を摘み解し易く行ふに便あるものを説述せり世人之に因て病毒に對する防備の方法を會得し其實行を怠らざれば則ち家國の隆昌を庶幾するを得ん乃ち一言之を書して序とす

明治四十三年七月

畑田道芝

### 自序

惡疫の流行は歳と共に増加し其底止する處あるを知らざるは常に識者の憂ふる所とす其原因に就ては種々ある可しと雖も主として患者其他のもの、怠慢若しくは不注意より病毒を不知不識の間に散亂するにあり故に苟も之れが虞ある場合には周密の豫防措置を施し一意専心病毒の勦滅に努めざるべ

からず然れども其原因を須知せざるに於て  
は其根絶を希ふも不能也編者此に留意し簡  
易通俗的にして實用を旨とし此の小冊子を  
編纂す若し本編によりて一般世人が傳染病  
に關する知識の缺乏を補ふの一助たる事を  
得ば望外の光榮とする所なり

編者識

## 傳染病論

宮本春重述

私しは無識無能ですから秩序的講釋をするは至難です  
が見聞したる處を概畧述べやうと思ひます

傳染病と申しますと傳染病豫防法と云ふ法律の第一條  
にコレラ、腸チフス、發疹チフス、赤痢、ペスト、猩紅熱  
實扶的里、痘瘡の八種であると明らかに書いてありま

す之れが法律で定めたる八種傳染病であります

傳染病とは特種とくしゆの病原即ち吾人われらの眼に視る事の出來ない小さな微菌ばいきんが吾人の身體内に這入りはいまして其の動作はたらきにより病氣を起すのであります

傳染の種類に觸接傳染と瘴氣傳染と觸接瘴氣傳染の三つあります

病原即ち微菌は微細なる生活体で最も下等なる植物に屬します

其の形は球狀、桿狀、螺旋狀とありて運動する爲め菌毛もうと稱する毛狀を有します又た植物の種子に比すべき体を産出するのを芽胞がほうと云ひますそして患者の組織そしき血液、体液、分泌、排泄物の中に居るのであります

傳染病毒が人の身體に竄入する部位は天然の孔竅こうけき即ち消化器の門口たる口鼻或は細微にして視る事の出來ない創傷きず又は皮膚の氣孔けあなでありますこうして体内に這入りました病原菌は其の初め到達したる器臟きざうに於て繁殖

し或は水脈腺（淋巴腺）に増殖し又は血管内に入りて血流に伴はれて遠隔の部位に達して生殖を遂ぐるのであります

斯くの如く病氣に罹るには總て潜伏期と申しまして毒物を發生するには一定の時間を費します其の數量人体に病狀を呈はすに至る間を申す又た疾病を呈はす前兆として疲勞、倦怠、食慾なく一般の疼痛の感覺あり頭痛と云ふように徴候を發するを前驅症と申します

又一種特別の健康障害として熱と云ふものが出ます熱に稽留熱（昇りも降りも熱）弛張熱（だらぐ）間歇熱（時間を置）の三種あります熱が出れば呼吸、心悸、脈搏が亢進しまして口が渴き汗が出て、深褐色の尿が出て頭痛、眩暈耳鳴り譫語を發し精神恍惚として心思散乱します又た先天性の免疫と申しまして身体の健康状態によりて感染しないものがあります之れで通論を述べ終りましたから各論に移ります

## 第一 コレラ

六

コレラと云ふ病原は今より廿七年前にローベルコツホ  
と云ふ人が埃及に流行したる（コレラ）患者の大便中  
より（コレラ）菌を発見し次で印度に大流行したとき  
確證したのであります之をコンマ菌と云ひます

潜伏期は數時より數日間ですコレラは始め何等の自徴  
もありませんが併し多少の倦怠を覺へ又は下痢します  
普通は俄かに夜間に薄い米泔汁の大便をし下腹に痛み

あり多くの下痢をなし吐瀉あり、四肢、倦怠、稀に上肢  
及上腿の筋肉は痙攣を起します  
顔面は土色となり眼は深く凹み眉は灰色となり鼻は尖  
り筋肉は寒冷弾力なく離脱をなします音聲は溷濁し  
て嘶嘎す之をコレラ聲と云ひます呼吸困苦となり腹部  
は凹没し漾盪します患者の多數は厥冷期に於て死に  
ます然れども廿四時間ももちせば下痢止み心臓の力を  
増し發汗して全治します



豫防としては寒胃及食傷を戒め暴飲暴食をなさず腸胃を健全にし身体を清潔に飲食物は煮沸して用ゆる様にするのであります

患者は必ず傳染病院に入れなければならぬのであります

## 第二 赤痢

赤痢の病原菌は近來或る醫家は「アメバ」と云ひ他の醫家は「バチルス」であると言ひ未だ一定しませんの

でありますそ一ですが傳播をなすは間接に糞便であります排泄せられたる厠土地に於て毒性を養成し或る機會を得て人を腦ますものです

潜伏期は三日乃至四日です此の病氣は腸に變化を起すのであります専ら結腸殊に直腸にあります其の部に炎症を發し且つ潰瘍に變するのです患者は發熱し頻りに疼痛を訴へて便に行きたくなるので之を反覆するのです醫者が之を稱へて裏急後重と云ひます排出する

糞便は血液粘液を混同し肛門は焼けるやうであるので  
す肛門變赤し上皮剝脱します

豫防は流行時には病人に近寄らず汚染したるものは焼  
却し食物は一切煮沸して用ゐる飲料水は生水を呑まぬ様  
にすること且つ衆人の集會所に近寄らず夜間は腹帯を  
する事です

### 第二 腸チフス

本症を單に窒扶斯と稱しますものがあります窒扶斯と

は希臘語の煙若くは霞と云ふ義です本病患者の精神恍  
惚として朦朧たるが故に此の文字を借用したので  
す而して我國には各地に流行し又は散在性に發する事  
殆んど一日の閑ある事ないのです

潜伏期は四週の永きに渉ることがあるのです然れども  
長短あるのであります

前驅症としましては身体が疲勞し倦怠、脱力、動作を  
厭ひ食事が進まず輕き頭痛手足の輕き痛みありて何ん

となく病に罹りたるを知るのです初めは少しく熱を發し日を遂ふて階段狀だんくさざに昇騰のぼりし凡そ一週間を経れば最高度に達し約一週間稽留こもりし第三週より漸次下降くだりします第四週の終に至れば全く普通の体温になります高熱は無慾げがなくなること状態となり時々譫語うろごを發します甚しきは腸出血ちかくたれることを惹き且つ種々合併症よびびょうを起し死を招き或は永く健康を障そま害ねするのです患者は恢復なほする時は食慾くいよくが非常に増加し盜食ぬすみぐいしたき感あるのですから能く注意して可成流動体

のものを食し決して固形体かたまりのものは食してからないのです猥りに飲食のみくいする時は癍痕はんあんを結ばんとする腸潰瘍ちようのくずれは菲薄うすつぺらなる事恰も紙片かみきれの如きを以て容易に破裂はれつして死滅を招くのです豫防に付ては赤痢と大体たいくが全じです

#### 第四 痘瘡（天然痘）

病原菌は不明にして男女老若を問はず起るのです殊に妊婦、産婦は感染うつりし易き者です然れども一度感染する時は免疫かこらぬたぢとなり五ヶ年位は大丈夫です其毒は痘瘡ほしそーのふきで疹

から出た汗しよの中にあるのです其の疹ふきでが化濃うみになるしたる時は強いので亦た乾いた結痂かさぶたのなか中や或は空氣の中にもあるのです

潜伏期は十日乃至十四間です發疹期ふきでのころあいたは約十三日です

(即ち雷疹期二日水胞期三日化膿期三日乾固期五日)

落痂かさぶたがをちるあいた期は七日乃至十日間です發病したる時は高さ熱を發しからだがみにそわぬおも身体違和頭痛のみくたしめんなん下困難及び薦骨おうもんのうへ部に疼いたみ痛があります數日の後ち熱度大に減少し同時に顔面に

赤色の疹ふきでを生じ漸次に身体の他部に及ぼし遂に全身に涉りくちのなか口腔、鼻腔等の粘膜まわりにも出來ます此の疹ふきでは初め微わずかに隆起する斑點まだらなるも漸く増大にして結節かたまりとなりまして固有こくべつなる疹ふきでと變ります水胞みづぶくれ、化膿うむ、乾固期かたまりのときを経れば漸次かさぶた痂を結び落痂すれば其の部に星狀ほしのようなの痘痕あばたを貽すのです

豫防の方法としては種痘うへぼうせうをなすにありて他に良法はありません今を距る百十四年前英國のジエンナーと云ふ

人が種痘法を發見せられ何れも其の恩澤ありがたみに浴してより痘瘡に罹るものが稀であります

### 第五 發疹室扶斯

發疹室扶斯は饑饉ききん或は戰爭室扶斯の異名があります此の病症は凶年に乘じて貧民を襲たそひ又は給養たふものがたらない遠征軍隊を侵たかすこと屢々あるがためであります傳播は觸接傳染ふくはつてうつるで患者の使用したる物品より媒介なかだちせられます潜伏期は九日以上です常に高熱を起し且つ發疹ふきでするを

以て特異です特異の發疹は發病後第三日乃至第七日で軀幹手足からだてあしに發し發病後兩三日を経れば出血して鮮紅まづか或は暗紅あかぐろみの血斑ちのまだらに變るのです患者の精神は常に昏慣めいりし熱の持續つづきは輕症では約三週間を経るいで緩和らくになります豫防は腸チプスと同です

### 第六 猩紅熱

此の病は觸接傳染の性を有し抵抗ごうかう力強く能く久しく傳染性るちからを失はないのです小兒に最も多く然れども一才未

満みみの嬰兒あかこには稀たぎれです 人に於おては殊たがに産褥婦あかに見る  
のであります散在性さんざんせいに來る事もあり又九流行性りゅうこうせいに來る  
こともあります

潜伏期かっふきは四日乃至七日です前驅症ぜんくしやうとして卒然そつぜん數回すうかいの惡  
寒若せきしくは戰慄せんりつを起し体温忽たちち四十度乃至其以上そのじやうに達  
することあります嚥下ののくだしの困難くわんなん、惡心あくしん、嘔吐おうと、頭痛づうとう、不  
安ふあん、譫語うひご、抽搐ひつぷりがあります而して皮膚ひふに發疹はつきです先づ頸  
部び、乳嘴突起部くびのまわりよういたせき及項部けいぶに見點はらわれし次て胸部むね、顔面かほに及ば

し忽たちちに渾身かみだちうに發疹はつきでします無數交互たぐさんいりみだれに相密接くつつきあひして彌蔓ひろがる  
性たの潮紅あかみを呈あらはします頰部ほ及前額部したいは著明いちじるしきなる紅色あかみを  
顯あらはすを見ます落屑はらう期このころと稱なづへまして皮膚くひが剝離はむしま  
す落屑くひは頸部くびに初まり一週乃至二週いっしゅうないしにっしゅうにて了ります  
豫防法よぼうほうとしては衛生法かたくまもりを嚴守かたくまもりして不攝生ふようじやうをなさざる  
ことに努めらるゝを宜しとす

### 第七 ペスト

ペスト病原菌りやうげんは兩端鈍圓りょうたんどんえんの桿狀菌かんじやうきんです腺せんペストは侵害あつかは

せられたる處の腫張、淋巴腺中に居ります肺ペストは略痰中に存在します本病は元來鼠族の疾病にて一地方に流行するや先づ必ず鼠族間に流行し而して人間に傳播し來るを常とします

前驅症としては倦怠を覺ゆ嘔吐の氣味あるも多くは缺如して居りまして俄然戰慄高熱を發します  
 時々惡寒あり身体疲勞淋巴腺腫張し疼痛ありて鼠蹊腺を侵し時としては液下或は肘腺を侵します腺腫は最

初別々に觸るゝも周圍組織及皮膚に炎症を波及し暗赤色を呈はします輕症で良好なる經過をなす時は全治しますも重症は死します

肺ペストは殆んど助かつたものは一人もありません死亡率は一〇〇%であります

豫防としては鼠族の疾病なるを以て之を驅除するを最も可とします其他蠅、蚊、蟻、虱、蚤、等も媒介をなすのですから注意して驅除し又皮膚にも注意して疵を

受けあひようにするのが肝要であります

## 第八 實扶的里亞

此の菌は今より二十七年前「クレープス」と云ふ人が  
 発見みだししました實扶的里亞の義膜きまく中に生存せいぞんします血液ちのなか及  
 内臓に侵入するのが兆です

形状は桿狀菌で變り易き性を持つて居ります屢々楔狀  
 とあり或は少しく彎曲します義膜中にての毒素が血液  
 中に汲收すいぢみせられましたして重症となります

潜伏期は二日乃至一週間位です急性に發熱し頭痛あり  
 飲食する時は咽喉のどに少しく疼痛いたみあり咽喉内に白色の膜  
 が出來ます之れが義膜です五日乃至十日の後ちは剝離はくぞれ  
 します時としては鼻腔はなのなかに蔓延へびのりします稀には目、鼻、耳に  
 及ぼします危険なるは咽喉のどより喉頭のどよけに及ぼすものがあ  
 るのです然る時は音聲嘶嘎こねしやがれし吠鳴ほねなくやう様に咳嗽せきします呼吸いき  
 切迫せりし笛聲ふえのねの呼吸いきをなす喉頭のどよけより氣管枝きくわんしに波及はくわくします  
 豫防としては流行時に於ては豫防注射をなし第一接くちうつ



吻其他咳嗽及び實扶的里菌に侵されある飲食物の斷片器具、衣服、寢具「ハンカチーフ」とは最も危険ですから能く注意をしないではいけませんぬれから一般の豫防法と云ふ事を述べようと思ひます

### ◎一般の豫防法

傳染病の豫防には消極的と積極的との二種あります例令(一)は外敵の侵入を防禦するので(二)は敵陣を襲撃するものがあつて清潔方法は消極的豫防手段で病毒の未だ

浸入せざるに先ちて彼等の襲撃防備です

消毒方法は積極手段で病毒土地にありとせば薬品を注ぎ家屋、衣服、糞便、と病毒の所在に向つて消毒法を行ひ病毒を滅殺するのであります

傳染病撲滅策として衛生思想を喚起し公共心を富ましむるにありますが何にを公共心と申しますかと云ひますと他の同胞の迷惑となり又た損害となるものは堅く之を避け又た避けんとする一片の衷情あるものの謂ひで

あります

此の一片の公共心ありて衛生の途を講ずべく病毒の撲滅を謀るべく多数の災危を除くを得べく健全なる國民を造るを得るのであります

個人衛生の發達すれば從て公衆衛生の發達するは必然です豈に忽諸に付してはなりませうや、ろこで常に注意べきは第一住居の不潔、第二井戸、第三便所、肥料溜第四臺所征伐、第五不攝生、第六隱蔽の陋習、第七

無意味に傳染病を恐る事の七つです

### ◎一般の消毒方法

消毒方法と云ては第一炊事場、總ての飲食器具は煮沸する事其他石炭酸、石灰乳を撒布するです、第二浴場は石炭酸及石灰乳にて消毒する事第三病室及び室内器具は藥物蒸氣消毒を施し疊の表面を消毒し更に日光に曝露し床下、壁、柱、其他を消毒し衣類寢具は蒸氣消毒に附し塵埃は悉く焼却する事

第四廊下、側壁、柱其他は盡く石炭酸水にて消毒すること

第五便所特に注意して便壺及び其周圍をば石炭乳にて消毒し戸扉、把手、壁、踏段、簾込、渡廊下、手洗鉢等は石炭酸水にて消毒すること

第六下水、塵芥溜、汚水溜、は石炭乳にて消毒する事

第七溝渠は石灰乳を投じ浚渫をなす事

第八井戸は悉く生石灰乳にて消毒し浚渫をなすこと

斯く病毒を未發に防禦の爲め清潔方法をなす且つ病毒發生しましたときは病毒所在に對し適當の措置を以て消毒方法をしましたときは之れが撲滅するは明かです消毒方法は焼却、蒸氣、煮沸、藥物消毒と云ふ事に法律が明示して居ります終りに望みて尙ほ一言致します

一、井水使用を全廢し水道淨水を用ゆること

但し水道栓に布片を纏附することは却て宜しくない若し止むを得ず之を用ゆる場合は日々取替へ、布片を洗

濯乾燥したるものを用ゐるのです

二、飲食物は凡て充分に煮るか又は充分に焼きて食し生物は一切食せざること

三、食器は成る可く多量の浄水又は熱湯を以て洗ふ事布巾は清潔なるものを用ひなければならぬ、故に不足なき様幾枚かを備へ置き常に日光に乾かし置くこと

四、各自の手指の消毒、凡る手指程様々の物體に接觸するものはなく、隨て細菌等の附着する機會も亦た多

いのです、故に屢々手指を消毒する事は豫防上頗る有力なる方法と信じます幸に我々日本人の習慣として便所より出でたる際には必らず手を洗ふを常とするを以て、今此の良習慣を利用して便所の手洗鉢に昇汞水の如き消毒液を入れ置かば其の都度、手指は清淨無菌とある譯です、之れ甚だ實行するに易く且つ消毒液の如きも安値に購ひ得るの便あります、故に此の方法は少くとも傳染病患者ある家族は勿論附近に發病者ある際

は是非共實行したきものです、尙外出者は歸宅に際し  
其都度衣服の塵埃ほこりを拂ふとか、含嗽藥うがいやまりを備へ置きて時  
々含嗽するが如きも皆之れ豫防に有効きゝめあるなる手段てだてであり  
ます、尙ほおわかりにならない處がありますれば往復  
ハガキで御問合せにあらば御答へを致します

### 傳染病論終

明治四十三年七月二十日印刷  
明治四十三年七月廿五日發行

〔定價金十二錢〕

東京市本郷區湯島六丁目七番地

編輯兼 發行人 宮 本 春 重

東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷人 田 中 作 一

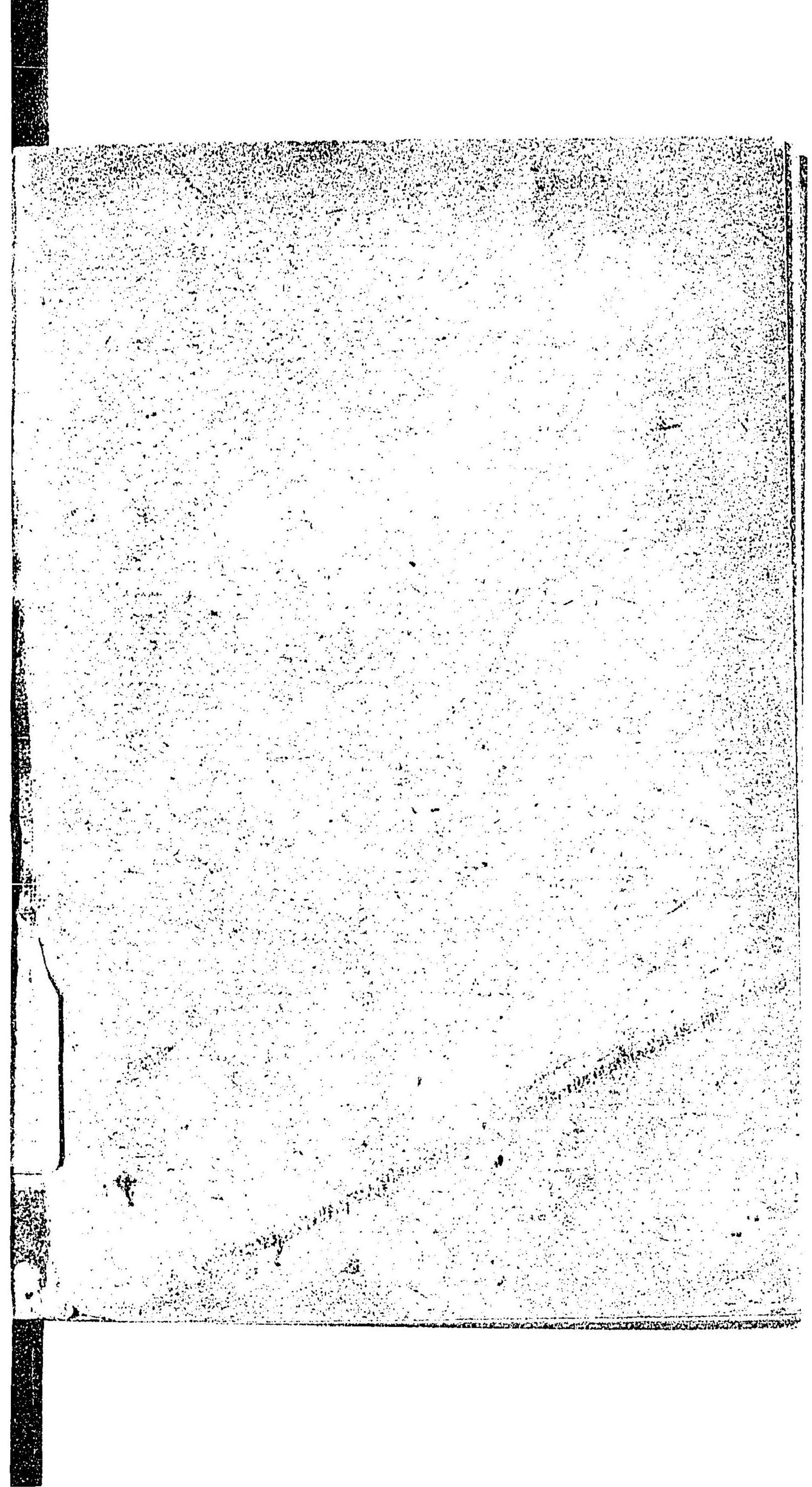
東京市神田區美土代町二丁目一番地

印刷所 帝國堂印刷所

261

381

複 製 不 許



實用  
現行傳染病論

醫藥指針社

東京市々醫 出浦義教先生序文  
東京市神田區役所 畑田道芝君序文  
東京市神田區役所 衛生係 宮本春重君序文

261

381

059381-000-5

特65-419

傳染病論

宮本 春重 / 編

M43

CBF-0244

